

第13回北日本頭頸部癌治療研究会

プログラム抄録集

日時：平成19年10月6日(土曜日)午後1時30分より

場所：市立札幌病院 2階 大講堂

札幌市中央区北11条西13丁目1-1

電話 011-726-2211

受付にて日本耳鼻咽喉科学会
学術集会参加報告票をご提出下さい

ご挨拶

第13回北日本頭頸部癌治療研究会を札幌で開催させていただきます。

テーマは舌癌を除く口腔癌ということに昨年の世話人会で決まりました。同じ口腔癌でも舌癌と違い、少しデータのとりにくい、発表しにくいテーマではあるかと存じますが、逆にこのような症例に当たった時の対応は大変重要であるともいえます。

パネルディスカッションは司会を2人にしました。活発なご討論をお願いいたします。

特別講演は東京の癌研有明病院頭頸科の川端一嘉先生にお願いいたしました。

先生の豊富な経験からくる有意義な講演を期待しております。

会終了後の懇親会ですが、昨年はケーターリングをやめての牛タンを堪能しましたので、今年は北海道の味ジンギスカンにしました。存分に堪能していただければと思っております。

講演会、懇親会、多数のご参加を心よりお待ち申し上げております。

第13回北日本頭頸部癌治療研究会 会長
北海道大学大学院医学研究科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野

福田 諭

プログラム

テーマ 『口腔癌(舌以外)』

パネルディスカッション (13:30~16:15)

司会 折館 伸彦 (北海道大学)
本間 明宏 (北海道大学)

- 1) 旭川医科大学 上田 征吾 先生
「当科における口腔底癌症例の検討」
- 2) 北海道大学 瀧 重成 先生
「北海道大学病院における口腔底癌の治療成績」
- 3) 札幌医科大学 近藤 敦 先生
「当科における口腔癌（舌以外）症例の検討」
- 4) 北海道がんセンター 山田 和之 先生
「当科における口腔底癌症例の検討」
- 5) 弘前大学 丸屋信一郎 先生
「当科における口腔底癌の治療成績」
- 6) 秋田大学 齊藤 隆志 先生
「当科で経験した口腔底癌症例についての検討」
- 7) 岩手医科大学 横山 哲也 先生
「当科における口腔底癌症例の検討」
- 8) 東北大学 片桐 克則 先生
「当科における口腔癌臨床統計」
- 9) 宮城県立がんセンター 小川 武則 先生
「宮城県立がんセンターにおける口腔癌臨床統計」

- 10) 仙台医療センター 浅田 行紀 先生
「当科における口腔癌症例の検討」
- 11) 山形大学 野田 大介 先生
「当科における口腔底癌症例の検討」
- 12) 福島県立医科大学 鈴木 康士 先生
「当科における口腔癌（舌以外）の治療成績」

特別講演（16：30～17：30）

司会 福田 諭（北海道大学）

「口腔癌（舌をのぞく）の治療
—手術治療における問題点、下顎骨の処理を中心に—」

川端 一嘉 先生（癌研有明病院 頭頸科）

パネルディスカッション

テーマ 『口腔癌(舌以外)』

1. 当科における口腔底癌症例の検討

旭川医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

上田征吾、太田 亮、片山昭公、坂東伸幸

片田彰博、荻野 武、林 達哉、原渕保明

当科における口腔底癌症例について検討した。対象は 1982 年 2 月から 2004 年 12 月までの間に当科で一次治療を行った口腔底癌症例 25 例である。内訳は 男性 23 例、女性 2 例、年齢 47~77 歳（中央値 62 歳）。T 分類は、T1 : 4 例、T2 : 14 例、T3 : 7 例。N 分類は、N0 : 12 例、N1 : 5 例、N2b : 4 例、N2c : 4 例。病期は I 期 : 4 例、II 期 : 4 例、III 期 : 9 例、IVa 期 : 8 例であった。組織型は全例扁平上皮癌（高分化型 : 9 例、中分化型 : 14 例、低分化型 : 1 例、不明 1 例）であった。治療内容は基本的に I 期では腫瘍切除のみを施行した。II 期以上では術前照射を 40Gy 施行した後、根治手術を施行した。全体の 5 年粗生存率は 61.9% であった。病期別の 5 年粗生存率は I 期 : 75.0%、II 期 50.0%、III 期 : 66.7%、IVa 期 : 60.0% であった。また全体の 5 年疾患特異的生存率は 77.0% であった。病期別の 5 年疾患特異的生存率は I 期 : 100%、II 期 100%、III 期 : 66.7%、IVa 期 : 71.4% であった。以上の結果をふまえ今後の治療方針などについて臨床的検討を加え報告する。

2. 北海道大学病院における口腔底癌の治療成績

北海道大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野
瀧 重成、本間明宏、折館伸彦、鈴木清護
鈴木章之、畠山博充、坂下智博、福田 諭

当科での過去 10 年間の舌以外の口腔癌新鮮例は、口腔底 26 例、頬粘膜 6 例、硬口蓋 5 例、上顎歯肉 2 例、下顎歯肉 2 例であった。その中で比較的頻度の多い口腔底癌にしぼり、その治療成績について検討報告する。

対象は 1995 年～2004 年の 10 年間に当科に受診した口腔底癌新鮮例 26 例。全例男性であった。26 例中 9 例は、初期治療の段階で様々な理由により根治治療を行えない状況であり、残りの 17 例に対し根治治療を行った。病期は I 期 7 例、II 期 1 例、III 期 2 例、IVA 期 7 例であった。治療方針としては切除可能な口腔癌は外科的切除を第一選択とし、放射線で根治治療を行ったのは I 期と IV 期のそれぞれ 1 例のみである。9 例は手術単独、6 例は術前に放射線・化学療法を組み合わせつつ待機的に根治切除を行った。

5 年生存率は I ～ III 期では 90% であったのに対し、IV 期では 40% と進行癌の予後が有意に悪かった。また、姑息的治療例を含めた 5 年生存率は I 期～ III 期では 81.8% であったのに対し、IV 期では 13.5% と進行癌の予後は極めて不良であった。治療法別では、術前の放射線・化学療法施行の有無で、治療成績には明らかな差は認められなかった。照射単独症例は、IV 期の 1 例は他病死し、I 期の症例は照射後残存のため根治切除、以後再発は認めていない。根治治療後の死亡例は 4 例で全て 2 年以内に再発し、3 例が頸部再発、1 例が遠隔転移死であった。

口腔底は舌と隣接するが、下顎骨に囲まれているため、下顎骨壊死のリスクから根治照射は行いにくく、また切除範囲により構音や唾液分泌機能の障害も大きく、治療において舌とは異なる難しさがある部位である。これまで諸家の報告同様、当科における口腔底癌の治療成績も良好とはいえず、また術後の頸部再発も少なくない。放射線化学療法も行いにくい領域であるため、IV 期では特に根治性を優先し十分な切除マージン設定とリンパ節郭清を行うべきと考えられた。

3. 当科における口腔癌（舌以外）症例の検討

札幌医科大学耳鼻咽喉科

近藤 敦、坪田 大、平 篤史、氷見徹夫

札幌医科大学附属病院においては、口腔癌の治療は耳鼻咽喉科の他に口腔外科においても比較的積極的に行われている。今回我々は、1994年1月から2004年12月までの間に当科にて初期治療を行った舌癌以外の口腔癌症例について検討した。舌癌を除いた口腔癌全体の症例数は25例で男性18例、女性7例であった。亜部位別の内訳は口腔底16例、頬粘膜6例、上顎歯肉1例、硬口蓋1例、下顎歯肉1例であった。この内最も症例数の多かった口腔底癌について今回解析を行った。

口腔底癌16例のうち性別は男性15例女性1例、年齢は48歳から73歳で平均56歳であった。組織型はすべて扁平上皮癌だった。当科における治療方針は基本的には手術であり、2002年までは術前照射（症例によってはCDDP少量投与を併用）を施行する症例が多かったが、2003年以降は術前照射は施行せず手術を行う方針としている。これらの症例についてstage別、T、N分類別、治療法その他の因子における生存率等を解析、検討し報告する。

4. 当科における口腔底癌症例の検討

北海道がんセンター 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍外科

山田和之、稻村直哉、永橋立望、田中克彦

北海道がんセンター 臨床研究部

山城勝重

北海道がんセンター 放射線科

西尾正道、明神美弥子、鈴木恵士郎

西山典明、小野寺俊輔

当院における口腔底癌の治療は、早期癌症例では組織内照射を優先し、進行癌症例では術前照射、根治手術を基本方針としている。また N0 症例の場合、予防的郭清は行わず、臨床的に転移が明らかとなった時点で頸部郭清を行っている。今回当院における口腔底癌症例について検討したので報告する。

対象は 1995 年 1 月から 2004 年 12 月までの 10 年間に、当科もしくは当院放射線科で一次治療を開始した口腔底扁平上皮癌症例 11 例である。症例の内訳は男性 9 例、女性 2 例、年令は 48 歳から 75 歳（中央値 58 歳）であった。T 分類は T1 ; 3 例、T2 ; 5 例、T4a ; 3 例、N 分類は N0 ; 7 例、N1 ; 2 例、N2b ; 2 例、病期分類は I 期 ; 3 例、II 期 ; 3 例、III 期 ; 2 例、IVa 期 ; 3 例であった。経過観察期間は 7 カ月から 124 カ月（中央値 71 カ月）で、Kaplan - Meier 法により算定した 5 年粗生存率は 71.6% であった。

5. 当科における口腔底癌の治療成績

弘前大学医学部耳鼻咽喉科

丸屋信一郎、南場淳司、白崎 隆

阿部尚央、松原 篤、新川秀一

口腔底癌は舌癌に比して、発生頻度は低いが、解剖学的に舌骨上筋群や舌下腺などの組織に隣接しているため、臨床的態度も異なっていることが予想される。これまでの報告によると 5 年累積生存率は約 30~70% とされている。今回、われわれは 1995 年から 2004 年までに弘前大学耳鼻咽喉科で一次治療が行われた口腔底癌 26 例（男性 24 例、女性 2 例、28~89 歳、平均 59 歳）について治療成績及び予後因子について検討した。組織型は扁平上皮癌 23 例、腺様囊胞癌 2 例、筋上皮癌 1 例で、病期分類は I 期 5 例、II 期 6 例、III 期 7 例、IV 期 8 例であった。5 年粗生存率は 39.7%、疾患特異的 5 年生存率は 53.8% であった。扁平上皮癌 23 例における病期別の疾患特異的 5 年生存率は、I 期 66.7%、III 期 62.5%、IV 期 87.5% であったが、II 期は 5 年生存に至らず、著しく成績不良であった。IV 期症例が最も成績が良好だったのは、近年、術後放射線・化学療法を積極的に導入するようになったことが要因の一つと考えられた。 II 期症例では切除を行わず、照射のみが行われ、治療中に制御不能に陥った症例や切除後、早期に再発や遠隔転移を来たした症例が散見された。またほぼ同時期に治療された舌癌の 5 年粗生存率は 61.8% で、口腔底癌のほうが予後不良であった。口腔底癌では多臓器癌（特に食道癌）による死亡例が多いことが特徴的であった。

6. 当科で経験した口腔底癌症例についての検討

秋田大学医学部感覚器学講座
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野
齊藤隆志、佐藤輝幸、ウォン ウェンホウ
鈴木真輔、本田耕平、石川和夫

当科で 1985 年～2004 年まで治療を行った口腔底癌新鮮例 71 例について比較検討した。男女比は男性 56 例、女性 15 例で男性優位で、平均年齢は 61.97 歳であった。病期分類ごとの内訳は Stage I が 11 例、Stage II が 10 例、Stage III が 12 例、Stage IV が 38 例であった。治療は原則として、術前放射線化学療法を行った後に手術を施行した。全体の 5 年生存率は 70.3% であった。それぞれの病期分類毎で 5 年生存率を比較すると、Stage I が 90%、Stage II が 87.5%、Stage III が 70.1%、Stage IV が 59.3% であった。

(訂正版)

7. 当科における口腔底癌症例の検討

岩手医科大学耳鼻咽喉科

横山哲也、山崎一春、石島 健、佐藤宏昭

1995年1月から2004年12月の10年間に、岩手医科大学耳鼻咽喉科で口腔底癌と診断され入院治療を開始した新鮮例14例（男性13例、女性1例）、26歳～81歳（平均年齢62.6歳）を対象とし検討した。組織別に見ると、扁平上皮癌13例、腺様囊胞癌1例であった。

Kaplan-Meier法を用いた累積5年生存率は全体で57.1%、病期別に分類するとStageⅡ判定不能（n=2）、StageⅢ 100%（n=3）、StageⅣ 33.3%（IVA n=8、IVB n=1）であった。

また手術例（n=9）の5年生存率が70.0%であったのに対し、手術未施行例（n=4）は0%と予後不良であった。今回の検討にも2例含まれているが、近年当科では口腔底癌においても手術不能例や拒否例に対しDocetaxelの超選択的動注化学療法を加えた放射線化学療法を施行している。現在のところ概ね良好な治療結果を得られており、今後の検討での手術未施行例における5年生存率の改善に寄与するものと期待している。

8. 当科における口腔癌臨床統計

東北大学病院 耳鼻咽喉・頭頸部外科
片桐克則、志賀清人、館田 勝、高橋 悅
牧 敦子、角田理紗子、小林俊光

1995年1月から2004年12月までの間に当科において初回治療を行った口腔癌症例56例につき検討した。口腔癌全体では男性40例、女性16例で、年齢構成は18歳から88歳、平均65.4歳。その亜部位別内訳は頬粘膜癌22例、口腔底癌17例、下顎歯肉癌11例、上顎歯肉癌6例であった。それぞれの疾患特異的5年生存率は47.8%、67.0%、63.4%、62.5%と有意差はみられなかった。さらにこのうち頬粘膜癌症例22例につき統計学的検討を行った。

頬粘膜癌症例の年齢、性別構成は18歳から88歳、平均年齢66.3歳、男性13例、女性9例であった。組織型は squamous cell carcinoma 19例、 verrucous carcinoma、undifferentiated carcinoma、adenocarcinoma が各1例。TNM分類ではT1：3例、T2：9例、T3：3例、T4：8例、N0：12例、N1：4例、N2 b：4例、N2 c：2例、病期別ではI期：3例、II期：4例、III期：4例、IVA期：10例、IVC期：1例であった。これら症例の治療成績、治療上の問題点などにつき検討、報告する。

9. 宮城県立がんセンターにおける口腔癌臨床統計

宮城県立がんセンター頭頸科

小川武則、松浦一登、加藤健吾
去石 巧、清川裕道、西條 茂

当科で 1993 年から 2004 年に入院加療を行った口腔扁平上皮癌一次治療例は 68 例であり、内訳は頬粘膜 17 例 (I : 0 例、II : 7 例、III : 2 例、IVA : 6 例、IVB : 2 例)、口腔底 23 例 (I : 5 例、II : 5 例、III : 5 例、IVA : 7 例、IVC : 1 例)、上歯肉・硬口蓋 10 例 (I : 0 例、II : 2 例、III : 2 例、IVA : 5 例、IVB : 1 例)、下歯肉 18 例 (I : 1 例、II : 4 例、III : 0 例、IVA : 12 例、IVC : 1 例) であった。治療内容は、頬粘膜癌では手術治療(ope)が 10 例に対し、(化学) 放射線治療((C)RT)は 7 例 (姑息 1 例)、口腔底癌では ope 21 例、姑息 RT 2 例、上歯肉・硬口蓋では ope 7 例、(C)RT は 3 例 (姑息 1 例)、下歯肉では ope 17 例、(C)RT 1 例であった。5 年生存率、疾患特異的 5 年生存率は順に、頬粘膜:23.5%、29.4%、口腔底 : 58.3%、68.9%、上歯肉・硬口蓋 : 50.0%、50.0%、下歯肉 : 61.6%、72.5% であった。進行度別の疾患特異的 5 年生存率は早期癌 (I,II 期)、進行癌 (III,IV 期) 順に、頬粘膜 : 35.7%、30.0%、口腔底 : 100%、49.9%、上歯肉・硬口蓋 : 100%、37.5%、下歯肉 : 100%、62.5% であった。これらの臨床統計に加え、我々の施設における手術合併症、術後経過や CRT 合併症についても報告する。

10. 当科における口腔癌症例の検討

仙台医療センター耳鼻咽喉科

浅田行紀、嵯峨井俊、高橋 薫、八幡 湖、橋本 省

1995年1月より2004年12月までの間に当科において一次治療を行った口腔癌25例について臨床的検討を行った。口腔底癌 9例（男性6例女性3例扁平上皮癌7例平均年齢58.9歳）、下顎歯肉癌 7例（男性6例女性1例扁平上皮癌7例平均年齢63.9歳）、頬粘膜癌 5例（男性1例女性4例扁平上皮癌4例平均年齢71歳）、上顎歯肉癌・硬口蓋癌 4例（男性1例女性3例扁平上皮癌3例平均年齢64.5歳）であった。部位別5年累積粗生存率は口腔底癌44.4%、下顎歯肉癌 57.1%、頬粘膜癌 26.7%、上顎歯肉癌・硬口蓋癌 50.0%であった。疾患特異的生存率は口腔底癌 51.9%、下顎歯肉癌 66.7%、頬粘膜癌 40.0%、上顎歯肉癌・硬口蓋癌 50.0%であった。原発巣にたいする治療方針としては口腔底癌の1症例（放射線治療）頬粘膜癌の1症例（放射線化学療法）、硬口蓋癌の1症例（放射線動注化学療法）の計3例が放射線を中心とした治療、それ以外の症例では手術を中心とした治療が行われていた。

11. 当科における口腔底癌症例の検討

山形大学医学部情報構造統御学講座
耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野
野田大介、小池修治、那須 隆、石田晃弘
石井健一、青柳 優

今回我々は当科における口腔底癌症例についてその治療法、転帰について検討した。

対象は 1994 年 1 月から 2004 年 12 月までの過去 10 年間に当科で一次治療を行った口腔底癌症例 17 例である。その内訳は男性 15 例、女性 2 例、初診時年齢は 62.6 歳(中央値)で、観察期間は 53.5 カ月(中央値)であった。組織病理学的内訳は扁平上皮癌 14 例、疣状癌 2 例、腺様囊胞癌 1 例であった。病期の内訳はⅡ期 5 例、Ⅲ期 6 例、Ⅳ期 6 例であった。治療内容については手術療法例が 12 例(内術前治療施行例 7 例)、化学放射線療法例 3 例(うち動注療法施行例が 2 例)、放射線療法例 1 例、化学療法例 1 例であった。

予後については病期別疾患特異的 5 年累積生存率はⅡ期で 75%、Ⅲ、Ⅳ期で 66.7%、全体で 69.7% と症例数は少ないが比較的良好であった。

手術施行例・非施行例疾患特異的 5 年累積生存率は手術施行例で 83.3% と良好な結果であったが、手術非施行例では 40% と予後不良な結果であった。

手術施行例の術前治療施行例・非施行例疾患特異的 5 年累積生存率は術前治療施行例で 85.7%、非施行例 80.0% と予後に大きな差はみられなかった。

12. 当科における口腔癌（舌以外）の治療成績

福島県立医科大学医学部 耳鼻咽喉科
鈴木康士、松塚 崇、鈴木政博、横山秀二
佐藤 聰、大森孝一
大原綜合病院 頭頸部・顔面外科
鹿野真人

当科における口腔癌（舌以外）の治療方針としては、手術拒否例や手術不能例を除き、手術を基本方針としている。T1は手術のみ。T2以上は進行度に応じ、術前治療として、全身化学療法（FP療法）、動注療法、放射線照射（20–40Gy）のいずれかを組み合わせて行い、欠損部位に対し、遊離皮弁（前腕皮弁、腹直筋皮弁）による再建術を行っている。

1995年1月から2004年12月までの10年間に、当科で初期治療を行った口腔癌症例は51例であった。内訳は男性38例、女性13例。年齢は30–85歳（平均66.0歳）。亜部位としては頬粘膜19例（37%）、口腔底19例（37%）、上歯肉・硬口蓋8例（16%）、下歯肉5例（10%）であった。手術施行例は45例（88%）であった。

このうち、例数の多い頬粘膜と口腔底について、検討を行った。

1) 頬粘膜癌

TNM分類別では、T1：3例、T2：13例、T3：1例、T4a：2例 N0：13例、N1：5例、N2b：1例 stage別では、stage I：3例、stage II：8例、stage III：6例、stage IV A：2例であった。疾患特異的5年生存率は79.0%であった。

2) 口腔底癌

TNM分類別では、T1：4例、T2：8例、T3：5例、T4a：2例 N0：10例、N1：3例、N2a：1例、N2b：1例、N2c：4例 stage別では、stage I：4例、stage II：5例、stage III：4例、stage IV A：6例であった。疾患特異的5年生存率は37.1%であった。

特別講演

「口腔癌（舌をのぞく）の治療 —手術治療における問題点、下顎骨の処理を中心に—」

癌研有明病院 頭頸科 部長
川端 一嘉 先生

舌以外の口腔（口腔底、頬粘膜、上下歯肉、口蓋）癌は、大部分が下顎骨や硬口蓋、歯槽骨などの骨に進展ないし近接する病変であり、手術が適応とされることがほとんどである。手術治療では、部位、進展範囲によって術式が選択され、再建の必要性の有無、再建材料が決定されるが、下顎骨の処理など口腔癌特有の問題点が存在している。ここでは口腔癌の手術治療において、日常臨床で最も問題となる下顎骨の処理、再建を中心に口腔癌の問題点についての我々の経験をお示しする。

我々の施設における下顎骨の再建とその結果は下表のようである。

Flaps used for mandibular reconstruction		Outcome of transferred flaps		
		Complications		
		No. of cases	None	total necrosis partial necrosis
□ Scapula				
Scapular osteocutaneous flap	64	(64)	41	3 1
Scapular + latissimus dorsi	8	(8)	4	1 1
□ Latissimus dorsi				
with rib	48	(48)	24	2 8
+ serratus with rib	6	(6)	2	1 3
□ Fibula	2	(2)	2	0 0
□ Ilium (+Forearm flap)	3	(3)	3	0 0
		(131) 7 (5.3%) 13 (9.9%)		

再建の成績は、他部位の再建が、ほぼ 3 % 程度の皮弁の loss であったのに比較して下顎再建の結果が最も悪く、頭頸部再建の中でも、難易度の最も高い術式であると考えている。下顎再建はおこなわなくとも手術を完了させることはできるため、実際に高齢者や、合併症を有するリスクの高い患者では、下顎再建を適応としないことや、チタニウムプレートなどの人工材料を用いることも選択される。再建結果の悪いことについての原因をふくめて現在の適応、方法についての考えをご紹介する。